
ぱられるくえすと

朧月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱられるくえすと

【Nコード】

N8276H

【作者名】

朧月夜

【あらすじ】

人気沸騰中の未来型ゲーム、「ぱられるくえすと」。プレイヤーが実際にゲームを体験出来ると言う今までにないゲームである。何処の店に行っても売り切れのこのゲーム。海星もやってみたいと思った矢先、幼馴染の流月からぱられるくえすとを手に入れたとの電話がかかる。

第一話 ゲームの中へ（前書き）

初めまして。朧月夜です。

主人公はこの二人ですが、メインは流月です。

海星がメインみたいな感じになってますけど、流月ですので。

第一話 ゲームの中へ

「ぼられるくえすと」。それは、誰もが注目している未来型最新ゲーム。

プレイヤーがゲームの世界そのものに入り、自分が謎を解いたり敵と戦ったり出来るというものだ。

勿論敵の攻撃を受けたとき実際にダメージを感じたり、部屋でやっていてゲーム内のフィールドを動き回ったら何時の間にか台所に来ていた、なんてこともない。

とにかくプレイヤーに都合の良いゲームなのだ。

それ故、中々手に入らないのだが、夏休みのある日、海星は幼馴染の流月から

「ぼられるくえすとが手に入ったから今すぐ来い」

という内容の電話を貰ったところだった。

それを聞いて海星はレポート用紙を投げ捨て、自転車で一目散に流月の家へと向かった。

中学二年生の今でも、海星は流月と一緒に登校している。一つは勿論幼馴染だから。もう一つは、家が近いから。

海星は、自転車から降りるとすぐにインターホンを押した。

聞きなれた音が鳴り、おせーぞ早く上がって来い、と流月の声がした。

海星は全速力で階段を駆け上り、流月の部屋の扉を開けた。

「おせーよバカ。んじゃ早速始めるぞ」

待ちくたびれた、という様子で流月は言うと、海星に眼鏡のような機械を渡した。

これをつけ、電源を入れると、次の瞬間にはゲームの世界へと行けるのだ。ちなみに2P対応。

「もうキャラ設定はさっきしといたぜ。つっても名前いれるだけだけどな」

流月が楽しそうに言う。

「しかし、こんなによく手に入ったな。何処行っても売り切れたぜ？」

「ああ、家の前に落ちてた」

「えっ……」

それって泥棒……と海星は思ったが、途中でその考えを無理やり中断し、電源を入れた。もとい、入れさせられた。

やがて、視界が変わり始めた。

見慣れた景色は消え、目の前には鬱蒼とした森が現われた。

第二話 ふざけんじゃねえスタツ、フゥー！

ゲームの中へ入り、森へ着いた俺と海星。

うわあ凄い、本当に自分が森へ来たみたいだ。

……なんて言ってる場合じゃない！　しまったああああ！

「あああああああああ！？」

「ど、どうした流月！？」

俺の突然の叫びに驚いた海星が声をかける。

心配してくれて有難う、遅刻したけど君は親友だ！　なんて言ってる場合じゃない！

……二回目？

「と、トイレえええ！」

「トイレかよ！　紛らわしいわ！」

「ち、ちよつとタンマ！」

俺はすかさずポケットに手を入れる。

実はゲームを開始すると同時に、さっきの眼鏡っぽい機械がリモコンになり、勝手にポケットに入ってくれているのだ！

え？　ポケットの無い服を着ていたらどうするんだって？

んな事知らん。ってかそんな服パジャマくらいでしょうが。

と心の中で一人芝居する俺。虚しい。

っていうかおかしいぞ？　リモコンが無い。ああ、反対のポケットか。

「……無い」

「は？」

「リモコンが無いイイイ！」

やばい。リモコンが無いとポーズはおろか、ゲーム終了する事だ
って出来ないよ！

一生ゲーム暮らし？ そんなのイヤだ！

「っつかもうギブ！」

俺は颯爽と……とは掛け離れたヨタヨタ歩きで草むらへ行き、用
を足す。

畜生、トイレくらいするんだった。コーラ飲みすぎた。待ちくた
びれて。

……っつて海星！ お前が遅いからだよ！

なんて事を思いつつ、俺は草むらから出る。

「リモコンあったら元の世界……っつうか人間界へ帰れんの？」

「人間界って……まあ、帰れる。一時中断でトイレに行くのも、勿
論可能」

「それすりゃ良かったじゃん」

人の話聞いてた！？

「いや……リモコンが無いんだってさっきも言ったじゃん」

「なんで？」

「知るか！」

んなこと俺に訊かれても困るっつうに！

っつかコイツ危機感ゼロ？

なんかボケーっと突っ立ってるし。

現しようよお……こんなに凄いゲームなんだからさあ……労力使いすぎてこの辺手抜きしたの？ 教えてスタツ、フゥー！

結構古いギャグを言いつつ、俺は木に激突。
今更だけど

「痛いイッ！」

「いや遅くね！？」

「……と思ったけど痛くない」

「……？」

ああ、忘れてたよ。

このゲーム、主人公の身体能力が5倍くらいに跳ね上がるんだっ
た。

つまり100メートル16秒だったら5分の1の3, 2秒。速すぎだよね！ 移動速度だけなら車とまではいかないけど、自転車くらいには勝てるね！

「おい流月」

不意に海星が声をかけてきた。

「コイツ、もしかしてボスキャラじゃねえ？」

「あ、そうかも」

怒った顔して追いかけてくるゴリラを見ながら、海星が言う。

俺たちは今逃げてるんだよ？ 後ろを見ながら走ったら若干だけ
どスピード落ちるよ？

それでも負けませんね、はい。

「あ、ボスキャラの音楽的な流れてきたぜ？」

そういえばそうだね。ってかこの音楽、どっかで聞いたような…。

俺が考えていると、海星が閃いたようで、口を開いた。

「これ、”サライ”じゃん！」

24時間走れと言うんですかスタッ、フゥー！

第三話 腐れ頭って書いてキノコと読んで（前書き）

もうじきテスト期間なんで更新遅れます。

なのでこれでしばらく投稿は無いかと……申し訳ございません。

第三話 腐れ頭って書いてキノコと読んで

サライはないでしょ。24時間走り続けるだあ？ そんな辛い事すんのは某珍獣ハンターだけで十分だ！ 本当に偉いよね、あのコ。

まあそんな話はさておき。ゴリラに追いかけられ続ける俺は嫌気がさし……思い切りドロップキックをした。

そしたらゴリラは吹っ飛んだ。そして木にぶつかった。なんだろう、映像の一コマ一コマが凄くはつきり見える。あ、視力も良くなったのか。そうは思えないけどなあ。

「お前、すげーじゃん」

海星がこっちを見ながら啞然とする。

うん、俺に出来るならほとんどいつもケンカで俺に勝ってるお前でも出来るよ。たまに俺が勝つけど。

「いや、なんか説明書に書いてあったけど、この世界ではプレイヤの身体能力が跳ね上がる訳よ。だから、お前でも出来るって」

「なーんだ。道理で強すぎると思ったぜ」

つまんなそうな顔して言いやがって……。いちいち勘に触るヤローだな。一回殴るぞ？

「ウホオオオ！」

「なんだ！？ この奇声。流月、お前か？」

「いや違うから！ さっきのゴリラだから！」

お前何をどう聞いたらアレが俺の声に聞こえんだよ！ 絶対ゴリ

ラの声だろ！

……今思ったけど、ボスキャラにゴリラ、なんてそのまんまの名前はイカンよなあ。

確かに腹以外毛で覆われて、筋肉隆々の腕とかどこをどう見てもその辺にいるようなゴリラだけどさ。無駄にデカイけど。

「流月……このゴリラの名前さあ……」

さすが海星。俺と同じ事を思っていたよ。やっぱり幼稚園からの付き合いなだけあるね！

「……マウンテンゴリラでよくね？」

「よくねエエエエ！」

俺は大声でシャウトするとさっきのドロップキックを海星に決める。そして海星は吹っ飛ぶ。

お、上手い具合にウハウホ言ってたゴリラに海星がヒットしてくれたよ。凄く痛そうだけど、わざとじゃないから許して。

「痛ッ……。お前フザけんなよ！」

なんか凄い怒ってる。何で？ ……ごめんなさい、俺のせいです。

「絶対アレはマウンテンゴリラって顔だろ！」

「そっちかいイイイイ！」

マウンテンゴリラの顔って、知らねーよそなん！ そんな名前のゴリラ聞いたことねーよ！

でも、痛い思いさせちゃったわけだし、もうマウンテンゴリラでいいか。だから許して。……さほど気にしてないね？ 海星くん。

「よ、よし！　そうと決まればこのゴリ……マウンテンゴリラを退治するぞオオオ！」

「おおオオオオ！」

……無駄にテンション高エな俺等。ってか今更だけど此処森だから付けたら「フォレストゴリラ」じゃね？　何故にマウンテン？　まあいいか。

マウンテンゴリラはウハウホ喚きながら近づいてくる。動きも大した事ないし、こんなヤツ――。

海星もそう思っていたらしく、俺のマネをしてドロップキック。マウンテンゴリラは、なんとかふんばってその場に持ちこたえる。

だが甘かったな。まだ俺がいるZE！

「食らえエエエ！　”破壊の一撃”！」
デストロイ・クラッシュ

「いやただのでこぴんじゃん！」

そうだよオオ！　なんか文句あのかよオオ！　……文句しかないですね、すみません。

でも、考えが甘かったな、海星。身体能力が跳ね上がった俺のでこぴんは、通常の俺のパンチより遥かに強いんだZE！　……ウザい？　すみません。

「ウホオアア……」

マウンテンゴリラは少しよろめいた後、地面に倒れる。どうやら俺のでこぴんがクリーンヒットしたようだ。

最初のボスキャラ討伐完了！　俺たちはハイタッチをする。

……ん？ マウンテンゴリラの口から何か出てくる。……人オ！
？ ってゲームだからまあ有り得るか。自分で言うのもなんだけど、
俺、今かなり冷静だよな。

「人か……どうやらボスに食われてたっつーお決まりのパターンらしいな」

「そのよーですな」

やっぱ君もそう思いますかい。

……っーかコイツ……頭キノコじゃん。あはは……どっかで見たことある！ キノピ……ダメだ言えない！ 畜生！

「おいこれキノピ」

「ダメエエエ言うなアアア！」

言ったらダメエエエエエエエエエ！

第四話 仲間キャラはロクなのいない

……一体何なんだ？ このキノコ頭の生物は。

頭はベースが白く、赤い斑点がある。どうやら気絶しているらしく、顔が青ざめている。眼は白く見開かれ、開きっぱなしの口からは赤い液体……。

白いパンツのようなツナギ。茶色い足。やっぱりこれはどっからどう見てもキノピ……ダメだ、やっぱり言えない！

俺が眼をつぶりながら頭を振って必死に何かと抵抗していると、何かもぞもぞと音がする。

嫌な予感が少し、いやかなりしたけど、現実から眼を背けちゃいけない！ ……なんて訳の判らない事を考えていた俺だけど、がんばってキノコ頭の生物を見た。途端に、俺は失神しそうになった。

「お前何やってんのオオオオオ！」

「は？」

海星くーん！ 君は何をキノコ頭の口に入れているのかな？ 雑

草？ 雑草か？ 雑草なのか！？

「いやコイツ気絶してるし薬草食わせてやろうと思って」

それが薬草だと言う証拠はあるのかい？ もし毒薬だったらどうすんだよ！ つーかそれ明らかに隣の茂みからとったよね。なんかむしろ跡があるし。

一方罪悪感まるで無しの海星は、ニコニコしながら薬草を口に入れている。そして、全部入れ終わった後、キノコ頭の頭を殴って口を閉じさせた。……いや普通に閉めてやれよ！

「よし、これでコイツが復活したらこの草は安全、変化無しだった
らただの雑草、悪化したら毒薬だって事が判明するな」

って毒見かいイイイイイ！

なに「俺って頭良くてね？」みたいな顔してんだよ！ 良くねーよ
！ 良くねーどころか最悪だよコンチキショー！

今思い出したけど、そーいやコイツどこぞのゲーム紹介雑誌に載
ってたなア。なんか仲間になるとかそーい系のキャラだった気が
する。もしコイツがめっちゃめっちゃ強かったらどうすんだよ……。ま
あ今となっては後の祭りなんだけど。

俺はたまらず声を出した。

「海星……もういいじゃねえか。殺人者になる前にとつと逃げ…
…」

「治ったあーッ！」

「!？」

……キノコ頭が復活してる!? マジかよ！ お助けキャラ登場
じゃん！ キャッホオオオオウ！

「君達は？」

キノコ頭が口を開く。俺は嬉しさのあまりめっちゃめっちゃハイテン
ションで「流月です！」と答えた。……答えてしまった。
で、コイツにとっての命の恩人、海星はというと……。

「……海星。ペッ」

ツバ吐くなアアアア！

なんだその不機嫌そうな顔！ お前もしかしたら死ぬの期待して
たろ！ とんでもねー野郎だなてめえは。

「有難う御座います。さっき変なゴリラに頭殴られて気絶してた
んですよ。あ、ボクこのゲームの仲間キャラ役の、なんかめっちゃめ
ちゃ可愛いって言われる事間違いないのプリティーマン、マッシュ
です」

……激しく殴りたいんだけどこの子。

「コ」じゃなくて「子」ってところがポイントね。いや、マイナス
ポイント。

しかも仲間キャラ役って……役とか言うなよ！

なんか放置しといた方が、ってか死んでた方が良かっただろ、っ
て思うくらいウザいよコイツは。しかもあの某ヒゲオヤジのゲーム
に出てくるキャラそっくりだし。名前「マッシュ」より「腐れ頭^{キノコ}」
にした方がいいんじゃないの？

「……おいてめー仲間キャラか？」

初対面の人（？）にもの凄い喋り方だね海星。まあ分からんでも
ないけど。

「はいそうですよ。一応貴方達をサポートすることになってるんで。
まあ、ついてきて下さい。ここ”始まりの森”を出て”始まりの草
原”に行きますから」

一応ってなんだよ！ しかもネーミングセンス無さすぎだろスタ
ツ、フー！

ってかこんな仲間キャラいらねえ。うぜえ。

「という訳でぼちぼちついてきて下さいね。ハア……。……………」
ハア」

何で二回溜め息ついた！？ 俺らと行くのがそんなヤカ！ お前
絶対^{ぜって}え喧嘩売ってるだろ！？

第五話 縄張りには気をつけろ

マッシュに案内され、「始まりの草原」へとやってきた俺たち。何気に広いこの草原、どこを見渡しても草ばかり。あ、マッシュがこっち見てる。俺と眼があった。アレ？ 何でツバ吐いたの？

「なあマッシュ、俺たちはどこへ行こうとしてるんだ？」

「……」アンベッグ”という街です。”始まりの街”とも言われます」

「ふーん」

あ、ちょ、海星、自分から聞いたってそれは無いわ。

棒読み？ 何そのどうでもいいよ的な受け答え。質問したのはア
ンタでしょーが。

その時、不意に前から何かやってきた。全身緑色の毛で覆われた、その生物。よく見ると、右手に棍棒を握っている。え、武器は反則
でしょ。

謎の生物を見て、マッシュが「ヤバい！ グリーンゾーングマ 緑地の熊だ！」と叫ぶ。
それを聞いて、海星は「誰だよ」と答える。や、アンタ関心なさ
ぎでしょ。なに指で遊んでんだよ。小学生か。

「クマー！」

グリーンゾーングマ 緑地の熊が鳴き声を発した。ってクマー！？ 鳴き声クマー！？

「気をつけて下さい！ こいつ等は緑地に住んでいる熊……普段は
おとなしいけれど縄張りに入ると凶暴になります！ それにしても
なんで怒ってんだろ？」

「いや此処が縄張りだからだろオオオオオ！」
「あ、そうか」

今気付いたんかいイイイイ！ ほら、海星が「アホだろ、マジキモいんだけど、消え失せろよ腐れ頭が」^{キノコ} ってブツブツ言ってる！
アイツかなり口悪いから！ 超が10個付くほどの毒舌だから！

突然、脳天に衝撃が走った。

……何が起きたんだい？ あ、そうか、棍棒で殴られたのか、アハハハハ――

「なーにしゃがんだこの糞グマアアアア！」

キレた俺は緑地^{グリーンゾーニングマ}の熊の脳天に踵落としを決める。上手い具合にヒットしたようで、ソッコー昇天でした。

「……意外とやるじゃないですか」

いや俺雑魚だと思われてた！？ この腐れ頭^{キノコ}が！ 「腐れキノコ」にしてやろーかアアア！

……すいません、取り乱しました。大人気なかったですね。ハイ。アレ？ ってか俺誰と喋ってんの？ なんて思っていたら、前方に街が見えてきた。成程、「始まりの街」というだけあって、中々広そうで発展しているようじゃないか。

と思っていたら、再び不意に何かが現われた。今度はバイクに乗っている――人？

黒いバイクのタイヤはでかめ。後は黄色い線が何本もあり、真ん

中に大きく「K I L L Y O U」の文字。乗り手は、まだ二十歳^{はたち}になっ
ていないような顔の青年が乗っている。黒い髪はきれいに整っ
ている。眼は薄く、鼻は低い。口はなんかアレ。……アレって何だ？

「おい、てめェら」

バイクに乗った人（省略して”バイ人^{じん}と呼ぶ）が口を開いた。

「此処は俺たち盗賊団”X”^{エックス}の縄張りだ。入ってきたからには、死ぬ
覚悟は出来てるんだろうな？」

「え……Xだって!？」

……そのXが何なのかは知らないけどさ、この草原、縄張り多く
ね？

第六話 バイクの扱いには気をつけろ（前書き）

前回までが短かったんで今回は長めに見ました。
楽しんで頂けたら幸いです。

第六話 バイクの扱いには気をつける

盗賊団X……。その言葉に怯えるマッシュ。バイクの「KILL YOU」を見つめる俺。ポテチを食う海星。!? ちょ、そのポテチどっから持ってきた!

「盗賊団Xといえば、世界最強にして最凶、ついでに最狂の組織ですよ! まさかこんな序盤から出てくるとは……」

最強なのか最凶なのか最狂なのかは知らんけれども、とにかくヤバイ組織らしい。

っつーか、お前主人公の味方役なのにコイツがどこに出るとか把握してねーのかよ。

……いや、コイツの場合把握してねーっつうより知らされてねーだけみてーだな。性格的に。

「Xだあ? 何そのネーミング。ガキ並みじゃん。マジ製作者何考えてんだよ死ねよ」

「おま、スタツ、フウーに謝れよオオオ! きっとそれしか思いつかなかったんだよオオオ! ってかそうであってほしいよね」

最後の方は別にスルーしても構いません。

で、肝心のこのお方。

バイ人さんは、なんかめっちゃイラついている。多分リアクションが大きかったくせに自分そっちのけで会話しているからだろう。あ、睨んできた。でも童顔だから全然恐くねえ。

「てんめーらァ! この俺様を無視すんじゃないエエ! 幹部だぞ!?! Xの、幹部だよ?」

「……なんで最後説明口調？ しかも無駄に間ア空けてるし」

「流月の言うとおりでよこの糞ボケ。ホントマジこういう調子こいてるヤツ見ると本気で殺したくなるわ。あーうぜえ」

凄じ暴言ラッシュだね海星。多分君は将来誰かに殺されるよ？

あ、でもその前に誰か殺すかもね。まあ元はといえば俺のせいなんだけど。

「まアそういうワケですんで死んで下さい」

「どういうワケだアアア！」

バイ人さんがマッシュを轢いた！ バイクで！ ヤバイよ、コイツまた死ぬぞ？

と思っっていたら、海星がマッシュにダッシュ……駄洒落じゃないよ？ とにかく、マッシュに向かってマッシュ……ダッシュして、葉草を無理やり口に突っ込んだ。もうこれ復活させることが目的じゃないよね、完全に。

……え？ いや、ダッシュをマッシュって言おうとなんてしてないから！ 誤解だって。

「てめーも始末してやるぜ」

あ、バイ人（敬称略、ってか何でさん付けしてたんだろ？）が俺に向かって猛スピードでつつこんできた。だけど、身体能力が跳ね上がっている俺はこんなもの軽々と避けれるさ！

俺はバイクを避け、すれ違い様にバイ人の背中に渾身のチョップを食らわす。

バイ人は「いて」とだけ言った。……マウンテンゴリラより絶対防御高いよね？ この人。

「油断しないで下さい！ この人には数々の伝説があるんです！」
「で、伝説!？」

海星がオーバーリアクションをする。伝説かあ。どんなもんなんだろ。

「例えば、顔を石鹸で洗っているとき、ふと鏡を見たら、顔面真っ白になっている自分を見て気絶したり、バスに10分乗り続けてエチケット袋10個消費して降りる瞬間気絶したり、体育館の裏でメチャメチャブスなヤツに告られて気絶したり、なんやかんやで気絶したり」

「いや下らねエ事で気絶しすぎだろオオオオオオオ！ つーかなんやかんやって何だアア!？」 3番目はわからんでもないけど」

たまらず声を上げてしまった俺。

でもさ、無理はないでしょ。伝説どころか自慢にすらならないからね。つーかこんなどうでもいい情報より弱点かなんかつけてくれよスタツ、フウー! ……そろそろ飽きた？

「ククク、どうだ凄ェだろ」

何で得意気なの？ しかも海星も「おおーッ……!」とか言っちゃってるし。

なんで？ 誰か理由をテル・ミー!

「……さて、この俺の凄さが分かった所でもう遅い。そのキノコや少年はまだ許せるが、さっき俺にチョップしてきたそのお前! お前は、死、確定だ」

「……あ、ソースか。……やれるもんならやって見やがれアアアアア!」

ヒャッホー！ と奇声を発しバイ人にダッシュする俺。

海星も、「あ、そういうノリで行く？」とか言って、着いてきてくれた。やっぱり持つべきものは仲間だよね！

マッシュは見物してるだけだけど。寝転んで。……殴るよ？

「フン、命知らずが。てめーらがこの直也様に勝てると思っているのか？」

テンション上がったたり冷静になったり忙しい人だなこの人。

つーか名前直也だったんだ。普通すぎるだろ！？

「死ねやあああああ！」

直也がバイクで突っ込んでくる。のを、俺たち二人は余裕でかわす。ついでにいうと、マッシュは再びはねられた。かわす努力をしよう！

俺はバイクがカーブを描き突進してくるそのスキを利用し、攻撃をしかけた。

海星もしかけた。うん、やっぱり気付いてくれたみたいだ。俺たちはほぼ同時に拳を出す――。

が、甘かった。直也はバイクから飛び降り、俺たちの攻撃を回避したのだ。そして、海星の腹にパンチを叩き込む。しかし、咄嗟に腹に力を入れてダメージを最小限に減らしたようだ。まだへらへら笑っている。ホント腹立つなーアイツ。まあ頼もしいっちゃ頼もしいけど。

「フン、普段から教室でケンカしてる俺にとっちゃ、あんなヘボパンチ何発食らっても耐えられるぜ！ ほらほらどうした？ おしりペ

ンペン！」

「いやガキかアアア！ おしりペンペンなんて最近言うヤツ初めて見たわ！」

俺が（見事な）ツツコミをしていると、突然直也が叫んで突進してきた。バイクには乗っていない。

「てめーのそのツツコミがうぜえんだよオオオ！」

「何で！？」

突然そんな事を言われた俺はショックで攻撃を回避出来なかった。だって、ツツコミがウザいって……。

腹にローキックを食らった俺は、マツシュの元へ吹っ飛ぶ。マツシュは「危ねーだろ！」といって俺を避けた。俺は岩にぶつかった。

……受け止めてくれても良かったんじゃない？

「あー判るわ。俺もたまにうぜえな、って思う時あるもん」

「だろ？」

お前は何意気投合してんだアアア！

海星、俺たちは親友じゃなかったの！？ 俺の勝手な思い込み？

「でもさー直也、俺もっと嫌いなヤツがいるんだよねー」

？ 誰だ？ そんな話聞いたことねえ。

ってか聞く気もねえ。アイツ自分以外の人間全部カスだと思ってるって俺思ってたし。

「へえ。あのクズよりうぜえヤツが。誰の事？」

「てめえだよ糞野郎！」

「――」

顔を殴られた直也。

地面にツバを吐く海星。

絶句する俺。

ポケットから何かを取り出したマッシュ。……カプセル？

「おい、マッシュ、それ何？」

俺はマッシュに訊いた。直也が吹っ飛んだので少し余裕ができたからだ。

まあさっきも下らねー会話してたけど。

「これですか？ これは四次元カプセルと言って中が四次元になってるカプセルで、このスイッチを押したら中身の物が出て来ます。まあ平たく言えば某猫型ロボットのお腹に付いてるアレ的な物ですね」

とにかくデカイものでも持ち運びできる便利な物らしい。……さっきのポテチもここから出したのか？ 蹴るぞコイツ。

でもま、一応訊いてみるか。

「それ何が入ってるの？」

「メタル・ランス鋼の槍”という槍です。文字通り鋼並の硬さですよ」

「最初から出せやアアアアア！」

「やアアアアア！」

俺がシャウトしてマッシュの顔を蹴った後、海星がきれいにリピート。そして同じく顔を蹴る。

「この腐れキノコ！ てめっ手助けする気ゼロじゃねーか！ 焼いて食うぞ！？」

「ホラてめーのせいで海星怒ってる！ さっさとその槍渡せ！」

こうして海星は鋼メタル・ランスの槍を手に入れた。

と、同時に直也が今度はバイクにのって突っ込んで来た。

「フン、そんな槍へ圧し折ってやるぜ！ 死ねエエエエエー——」
「槍投げ」

突っ込んで来た直也のバイクに向かって、海星は鋼メタル・ランスの槍を投げた。それは直也のバイクの「K I L L Y O U」の文字の「L」と「Y」の間くらいに突き刺さった。途端にバイクは爆発した。

「いけね、やっちった」

「やっちったじゃねエエエエエ！」

草原中に俺の言葉が響き渡った。と思う。

第七話 田中賞

草原に立ち昇る煙。草原に立ち尽くす俺。

まさかこんな事になるとは……。って、やったのは俺じゃねえけど。

やった当の本人は、さっきのポテチを食っている。呑気だねー。あんなことしていて。君の神経を疑うよ。

「おい、マッシュ、これ大丈夫なのか？」

「ん、ああ、うん」

何だそのハッキリしない返事は！？ 恐らく大丈夫じゃないんだな。

まあどうせゲームだし人殺しても大丈夫……。なのかなあ。やつぱりいけない気がする。

「おい、海星、もう殺人なんてすんなよ」

「は？ いや、生きてるだろ。序盤とはいえボスだぜ。流石にこれぐらいで死ななかつたらいいのにな」

いやお前の願望じゃねえか！ うっすら後悔してるだろ！

とツツコミを（心の中で）し終わった後、マッシュが話しかけてきた。

「多分、いや絶対死んでます。このゲームの序盤のボスには、それぞれ”弱点”なるものが設置されていて、そこを攻撃すると一撃で死にます。一番最初にゴリラを倒した筈ですよ？ ソイツは額が弱点で、今の盗賊団の幹部のなんかは、バイクに槍を投げると木っ端微塵に吹き飛びます」

いやさり気に恐い事いうな！ 木っ端微塵で。

それにしても、マウンテンゴリラを倒せたのは弱点を攻撃したからだったのか。別に俺が特別強^{つえ}え訳じゃなかったのな。ガツカリだよ、全く。

つーか直也の弱点がバイクって、アレ弱点っていうのか？ どっちかっつーとバイクの弱点だろ。

「ま、そーいうことらしいから、早いところ行こうぜ」

「いややっぱお前反省の色0^{ゼロ}!？」

「馬鹿野郎ッ！」

「ぐ、ぐふえ」

俺は突然海星に殴られた。

そうか、そうだよな。後悔してない訳ないよな。

場を和ませようとした一言だったんだよな。

ごめん、俺親友なのに何も判っちゃいなかった――。

「あのバイク壊しちゃった事を反省してねえ訳ねえだろッ！」

「いやバイクかよ！」

ふざけんじゃねえ！ なんかクサイ台詞吐いちゃったじゃねえか

！ すげー恥ずかしい！

「全くだぜ……俺様の大切なバイクをぶち壊しやがって……！」

「そうだそうだ……え？」

突然、煙の中から声がした。

ハッとし、後ろを振り向くと、そこに立っていたのは――。

「バ、バイ人!？」

「るせー、直也だ。何だ、バイ人って」

バイ……直也、お前は木っ端微塵になったハズじゃ……!!

おかしいと思いマツシュを見ると、眼を逸らされた。うん。しっかりこっちを見ようか。

「お、お前はアレで死ぬ筈じゃ……」

珍しく海星も驚いている。

そしてこう言った。

「なんでお前なんだよオ! バイクが残ってたら良かったのによオ!」

「いや嘆くところじゃねえ、そこ」

直也が丁寧にツツコむ。

殺されかけたってのに随分冷静だね。

「とにかく、俺様があの程度で死ぬわけねえだろ。ふざけてんのか? つーか結構痛かったし。ほら見ろ、所々怪我してるだろ」

確かに結構な量の血が流れている。

つーか何でそんな冷静なの? マジでびっくりするんだけど。

いや逆にブチ切れられても困るけどさ。

「まあ良かったじゃねえか。生憎、俺も戦う元気は余り残ってねえ。見逃してやるよ。だが、てめーらはブラックリスト逝き確定だ」

「ブ、ブラックリスト逝き……?」

「そうだ、盗賊団Xのブラックリストだ。そこに載ったヤツは、死

ぬまで命を狙われる。また、死んでも尚、死体に小便とかかけられる」

「なんだそれ!? 別に死んだんだからよくね!?」

コイツ、意味分からん……。

直也は、せいぜいそのポテチでも食って待ってるんだな! と、良く分からない捨て台詞を吐いて去って行った。何はともあれ、一件落着だ。いや、でもこの展開は「一難去ってまた一難」になりそうだな。

俺たちはロクに休憩もせずにアンベッグに向かった。嘘つきマッシュによると、Xは追っ手を結構早く送ってくるらしく、早めに宿屋で休んだ方がいい、とのことだ。

信用はあまり出来ねえけど、俺も草原で休むよりは多少大変でも宿屋でゆっくり休む方がいい。だからその考えに乗った。

しばらく歩いて、街が近くに見えてくると、海星が呟いた。

「もう、ゲームはクリアするまで止めれねえし盗賊に命狙われるしで散々だよな」

「え!? 今……なんて!?!」

急に驚くマッシュ。確かにゲーム止めれねえのは辛いけど、そんなに驚く程か?

尻餅ついて、手に持っていたポテチ3袋落とすほど。ってかポテチ持ちすぎ。海星もさっき食ってたし。好きなの?

「だからー、ゲームクリアするまでセーブとか一切出来ねえの。…プログラムのお前に言っても分かんねえと思うけど」

「いや、分かります。……それはいわゆる”田中賞”を受賞した、という事なんです。……とても名誉であると同時に、とても危険な

それこそ、命を落とすかもしれない程の」

.....え？

第七話 田中賞（後書き）

更新遅れてしまいました（汗）すみません。
ちなみにブラックリスト逝きの「逝き」は誤字ではありません。

第八話 ボツたくりには要注意

……誰だ？ 田中って。

「おい、田中って誰だよ答えねえと木っ端微塵に吹き飛ばすぞマザコン野郎」

ちょ、いきなり暴言かよ！ 確かに気になるけどその言い方はないよ！ つかコイツマザコンだったの？

と思っていると、マッシュ（マザコン疑惑）が口を尖らせて言った。

「失礼な！ ボクはシスコンですよ」

いやどっちにしろコンプレックス持ちかよ！ マザーでもシスターでもどっちでもいいわ！

何「全くもう」って顔してんだよ！ こっちが「全くもう」だよ！

っーか田中について教えろ。てめーが何コンだろうがそんなの関係ねえんだよ。……今、オッパッピーが頭に浮かんだ人、正直に手を挙げよう。……てめ、シスコン、なんで「ピーヤァ」って言い出したんだよ！？

「おい本当に吹き飛ばすぞシスコン」

海星がマッシュの首を掴んで言った。マッシュは大人しく頷き、蒼白い顔で説明を始めた。

「田中……本名”田中三郎”はこのゲームの開発者です」

そうなのか。田中は開発者か……どうでもいい！

「田中賞とは、全国で1台だけ、”本当の”ばられるくえすと……つまり、ゲームの世界へ飛んだ気分ではなく、”ゲームの世界へ飛ばされる”ものを当てること。これが田中賞です」

「何だそれ。ありがた迷惑なんだけど。死ねよ田中。俺らが死んだらどーすんだよ」

「いえ、ちゃんと見返りもありますよ。田中賞受賞者がゲームをクリアすると、何でも願いを叶えてくれる、と聞いたことがあります。噂なので本当かどうかは知りませんが」

……！ 何でも願いを叶えてくれる……！

面白くなってきたじゃねえか。田中三郎からの挑戦状、確かに受け取ったぜ！

「海星……」

「……ああ」

俺たちは互いを見つめ、同時にゆっくりと頷いた。

そう、俺たちの願いは――。

「「シュ億―ク万里長―者ムをたにらふく食なべること！」」

……？

かみあって……無かったよね？

海星……なんて言った？

幼稚園の時、「二人で億万長者になろう」って……言わなかったっけ？

「おい海星、今なんて言った？ よく聞き取れなかったけど」

「え？」 シュークリームをたらふく食べる事”って言ったけど」

アホかアアアア！

何故にシュークリーム！？ 約束は！？ つーか億万長者になっ

たらシュークリームなんていくらでも食えるだろうが！ 勿体ないわ！

「ハイハイ、もうなんでもいいでしょ。さっさとアンベッグに行って宿屋を探そうね」

「てめえ何だその口調！ ケンカ売ってやがんのかああア！？ ブチ殺すぞ腐れシスコンキノコ野郎！」

「ひ、酷い！ それはないんじゃないですかア？」

「るせえ、二度と口を開くんじゃねえ！ 口を封じられたくなかったらな！」

……もうその辺にしといた方が……。

ちよ、マッシュ涙目なんだけど。

ちよっと可哀想かなあ。

しかし、次の瞬間。

「もう、二度と口を開かないで下さいよ、シスコンの流月さん」

「死ねエエエアアアアアア！」

何で俺だアアアア！？ ふざけんじゃねえ！ 海星はてめえに

言っただろうが！

てめえマジ調子こいてんじゃねえぞ！？ 本気でブツ殺すぞ！？

……さっきは取り乱してしまった俺。だがもう大丈夫だ。ちゃんと正氣に戻った。

俺たちは、今、アンベッグの宿屋へ向かっている。場所は地図に書いてあったから大丈夫だ。と、そんなことより。

……この街、以上に暗いんですけど。いや、光の方じゃなくて、活気がないとか、そーいう。

住人の目は例外なく虚ろだし、店があるかと思えば、店主は死にそうだし、天井に変な縄はつるしてあるし。よく見たら街の至るところに丸く括った縄が吊るされてるし。……その中で以上に宿屋が派手だし!?

「んだよ” 始まりの街” だつてのに辛氣臭えところだな。こっちまでテンション下がるわ」

お前は多少テンション下がったくらいが丁度いいと思うぜ。

「まあ、暗いのは気にせず、宿屋で休んでいきましようよ」

「ちよつと待て!」

俺はマッシュの足を引っ掛けて転ばした。

あ、痛かった? ゴメン。

「先に武器屋に行こうぜ。色々武器が無いと、もし敵に襲われでもしたら大変だからな」

「それもそうですね」

というわけで、俺たちは武器屋へ向かった。海星は地面にツバを吐いた。

……何で?

「……いらっしやい……」

武器屋の店主と思われる人物が以上に小さい声で言った。

店の店主までこんななのか！？　どうなってんだこの街。

「……ある武器といえはこの”アイスの棒・糞”^{ヘズレ}くらいかな……」

店主コラアアアアア！

何でよりによってアイスの棒なんだよ！？　せめてアタリにしろ

やアアア！

これのどの辺が武器だ！？

「え、それしかないんですか」

「店主てめえ殺すぞ」

「……ああ、待って下さい、もう一つあったような……ああ、これだ」

海星の脅しにも全く動じない店主。ある意味暗くて良かったかもね。

その暗い店主が取り出したのは、一本の槍。なんだ、いいのがあるじゃないか！

「……これ、”地獄の槍”^{ヘル・ランス}……ほしかったらタダで持ってっていいよ……」

「あ、じゃーお構いなく」

海星！　お前動くの早すぎだよ！？

そして宿屋。

赤や黄色のネオンがチカチカ光る看板。

一応普通の宿屋っぽいけど、逆に怪しい。なんでこうも明るいんだ、ここだけ。

「おいなんか怪しくね？　まあいいか」

妥協早いよ海星！

「……いらっしやい」

見た目だけかよ！　此処もめっちゃ暗エよ！

フロントから負のオーラが漂ってるし！

「……泊まりに来たんだろ？　さっさと休みなよ……疲れているね……早く永眠ねむった方がいいよ……」

いや恐い！　漢字！　間違ってるよオオオ！

「あ、じゃあお言葉に甘えて」

「号室は444ね……」

お前は不信感という物を抱け！

どう考えても怪しいだろ！　つーか444とか露骨すぎじゃね！？
今気付いたけど、此処死デスホテルの宿屋って名前だし！

……なんだ、普通じゃん。

444号で怪しいとは思いつつも、睡魔に勝てず眠ってしまった俺。

しかし、何事もなく目が覚めた。なんだ、怪しんで損したよ。…
…名前はおかしいけど。

「いやーいい布団でしたよー」

マッシュが受付の人に言う。

「……代金は1億円ね……」

……ボられたアアアア！

第九話 ギャップって有り過ぎても困るよね（前書き）

テストが終わったのでこれからはなるべく早く更新していきたいと思います。

第九話 ギャップって有り過ぎても困るよね

「ふざけんな！ そんな金持ってねえぞ！？」

「……なら体で」

「気色悪い事言うな！」

俺は店主をぶっ飛ばした。何故かって？ キモいからさ。果てしなく。

「あゝ大丈夫ですよ流月さん。さっき直也を撃退した時、300P^{ばられる}手に入れましたから」

「単位変わってんじゃない！ 何Pって」

「このゲームの通貨単位です。1億円は100Pですので、丁度足りますね」

「……つか何でお前らが円の事知ってんだよ……」と思ったが、ゲームなので言わなかった。

「アンベッグ・東口」

「さて、このゲートを通れば、魔物の住む谷に行けますけど、どうします？」

「どうしますって言われてもよー。ってか俺らはなんでこの町に来たんだ？」

そう言えばそうだ。海星の言うとおり、この町へ来た目的が分か

らない。

ゲームをクリアするため、っていえばそうなんだけど、マッシュ
シスコン
がゲームクリアの事を知っている筈もない。ただのプログラムなん
だし。

「ああ、この町に来たのはゲームクリアして貴方達を元の世界に帰
す事ですよ」

「何でお前がその事知ってんの!？」

ここでまさかの発言! どうなってやがんだ?

「だって、貴方達は”田中賞”受賞者ですよ。田中賞を知っている
ボクがその事を知っているのは当然でしょう。解りましたか?(っ
たく少しは頭使えよ低脳クズ野郎)」

うん、なんだかものすごく罵られた気がするけど、気のせいって
事にしておこう。

「じゃあ、その魔物が住んでるっつー谷に行けばゲームクリアにな
るんだな?」

「まあ、そーゆー事っすね。頑張ってください」
「何で他人事なんだてめー」

海星がマッシュの頭を鷲づかみにする。

「やだなく、冗談じゃないですか(うわ、だりー。マジ最悪なん
だけど)」

なんかマッシュのキャラが崩壊しているような気が。
ああ、こっちがベースか。

なんて思っていると、突然人が駆けつけてきた。黒い髪の毛はきれいに7・3だ。スーツを着て鞆を持っていることから見ると、どうやら極々普通のサラリーマンらしい。

「てめーらもとつとバックれた方がいいぜ！ 今ヤベー連中が屯ってやがんだ」

言葉使い悪っ！ 海星と競える程の毒舌家だこの人！
にしてもヤベー連中ってなんだ？

「なんかKILL YOUって書かれたバイクに乗ってるんだ！
後は……チワワいっぱい連れててモヒカンだったな」

何そいつううう！ チワワ連れのモヒカン！？ ギャップ激し
すぎだろーが！

……コイツもギャップ激しいけど。

「KILL YOUか……おいマッシュ」

「はい、まず間違いなくXの追っ手ですね」

「チッ、もうきやがったか。まあいい、^{コイツ}地獄の槍を試すいい機会だ。
行くぞ流月」

海星が頼もしく見える……！ そう思った瞬間、海星は石に躓いてコケた。だせえ！

（アンベッグ・中央広場）

俺たちが中央広場へ着くと、マシンガンを持った二足歩行のチワワが10匹くらいいて、銃を乱射していた。

何この絵！ 想像出来ねーよ！ チワワ恐すぎる！
そして、そのチワワに囲まれているのは、モヒカンの男。どうやらコイツがチワワを仕切るリーダーらしい。
それにしても、許せねえ。罪の無い人々を殺してへらへら笑ってやがる。たとえゲームでも許せねえ。

「うわーこりゃ酷えな」

海星もそう思ったらしく、顔を歪ませている。

「何あのモヒカン野郎。マジブサイクなんだけど」

「顔かアアアアアア！？ 別にどうでもいいじゃん！ 確かにブサイクだよ！？ でもしょうがないじゃん！ 生まれつきだから！ ブサイクなのは多分生まれつきだからアアアア！」
「うるせえアアアアアア！」

俺のツツコミが五月蠅かったらしく、モヒカンが怒鳴った。

「てめえ人の事をブサイクブサイク言いやがって。しょうがねえだろ！？ 整形してえよ！ 俺だって！ ちなみに俺は盗賊団Xの幹部、モヒー。以後宜しく」

名前ストレートオオ！ モヒーって。

モヒーは、金髪のモヒカンにグラサンを掛けている。服は黒い全身タイツ。はつきりいって、変体。

「フン、その五月蠅いツツコミ、どうやらてめえらか。直也を倒した3人組ってのは」

「ツツコミが五月蠅い事で有名だったの！？」

「黙れ」

モヒーが（恐らく）鋭く睨んで言った。
中々の威圧感。マッシュはすげービビってる。海星は……うわ！
ゴミを見る目つきだよ。

「ククク……どれほどの連中かと思えば、ただのガキじゃねーか。
こんな糞共に直也はやられたってのか？」

「言ってくれるじゃねーか。糞かどうか思い知らせてやるよ。この
キノコは糞だな」

「酷くないですか!？」

黙れ、と海星が言った。そして、モヒーに向かって突進していった。地獄ヘル・ランスの槍を構えて。

しかし、チワワが2体立ち塞がり、マシンガンで攻撃する。此処が俺たちのコンビネーションの見せ所。海星が素早く銃弾をジャンプしてよけ、スキが出来たチワワを俺がリアットで片付ける。

そして、海星が槍をモヒーの腹目掛けて出した――。

槍は、折れた。

「脆オオオオオ！」

第十話 名前に騙されてはいけない（前書き）

更新が大分遅れてしまいました。申し訳御座いません。

パソコンの調子が悪くて……。

買い換えてもらったのでこれからはサクサク更新できるかと思えます。

本当に遅れて申し訳御座いませんでした。

第十話 名前に騙されてはいけない

脆い！ 何が地獄の槍だ！ 非常に脆い。何度も言うけど、脆い！

「な、なんじゃこりやああああ！」

海星もうろたえている。

うわ、周りのチワワ達からの目線が白い！ なんだこいつら、適
な目だよ！ チワワのくせに！

「チイツ、まがいもんか！」

「フン、本当の攻撃と言うものを見せてやる。」 モヒークラッシュ
"！"

モヒーが海星の腹を殴る。海星は血を吐き、頭をだらりと下げる。

「死ねい！ "モヒーダイナマイト"！ "モヒースペシャル"！

"モヒーキック"！ "モヒーエルボー"！

いや技名イイイイイイ！

果てしなくダサいんだけど！ 名前のあとに何か付けりゃいい
てモンじゃねえから！

つーかネーミングセンス無さすぎだろ！？

「やってくれたじゃねえか……！」

「ッ！？」

海星がお返し、と言わんばかりにモヒーの腹を殴った。

そう、俺たちは体が強化されているため、あんなにボコスカやら

れても意識を保っていられるのだ。

「ぐ、ぐおおお……なんだこの攻撃力はア……」

「まさかこんなんでダウンしねえよな？」

「！」

なんつーか、酷かった。

海星はモヒーの全身を（主に顔面）何度も何度も殴った。おまけに弁慶の泣き所を蹴った。

これには流石のモヒーも効いたらしく、苦痛に顔を歪め、バイクに乗った。そして、こう叫んだ。

「く……俺は休んでいる！ ティワワ親衛隊よ、時間を稼げ！」

イエッサー
「YES, sir」

「喋れたの!？」

俺がツツコむのとはほぼ同時に、チワ……ティワワ達が銃を乱射した。

たまらず俺達は近くの岩に身を隠したが、ガードが破れるのも時間の問題だ。どうしようかと思っていたとき、マッシュが言った。

「このままではちが開かないので、ボクの必殺、」
グレイトマッシュキャン
「で目を眩ませ、その隙にティワワを倒しましょう」

「……あの、ルビがおかしいんだけど。なんか大げさなんだけど」

「さあ、レッツゴー」

「無視かい！」

マッシュは何やら手に気を集中しているらしく、真剣な顔だ。

やがて準備が出来たのか、マッシュの手は微かだが、緑色に光っていた。

「ふう、エネルギー充電完了……じゃあ、行きますよおッ！」

「Lock on」

マッシュが岩から飛び出した瞬間、ティワワが銃をマッシュの額に押し付けた。

って何やってんのオオオ！

「お前全然だめじゃん！ 行きますよつつた瞬間にデッド・オア・アライブ!？」

「あばよとつつあん」

「誰がとつつあんだ！」

と言いながらも、元気が有り余っている俺はティワワの顔面にストレートを決めた。

そして、フリーになったマッシュが胞子を放つ。あたりは緑色の煙でいっぱいになった。何も見えない。これならティワワに見つかることも……ってちよつと待てええええ！

「お前コレティワワが何処にいるのかすらわかんねえじゃん！ 意味ねえじゃん！」

「おい誰に話しかけてんだ？」
「！」

なんと、俺がマッシュだと思って話しかけた人影は、モヒーだった！

やばい、と思った瞬間、俺は顔面にキツイ一撃を食らった。感覚で血が出たのが分かった。

「時間稼ぎご苦労だったな、ティワワ。後は俺がやる」

OKと言ひ、葉巻を3本同時に吸ひ始めたティワワ達。
……お前ら本当にチワワ？

第十一話 普通の顔が気色悪い

モヒーが俺に攻撃を仕掛けてくる。

が、身体能力の上がった俺にとってこの程度の正拳やローキックをかわすことなんざ朝飯前だ。

俺は次々と攻撃をかわし、逆にカウンターでモヒーの腹を3回くらい殴ってやった。

「ぐおおお……！」

モヒーは吐血し、呻く。

そこに海星が乱入してきた。そしてモヒーのモヒカンを乱暴に掴み、地面に叩きつけた。

……毎度の事ながら酷えな。

つかマッシュの胞子消えてるし！ 持続時間短すぎだろ！

心の中でツツコむと、急にマッシュが現れ、人差し指を立てながら言い始めた。

「説明しよう。田中賞受賞者のお助けキャラは極端に弱いのだ」

「ざけんなアアアア」

もうお前帰れば！？ と思った俺は雑魚マッシュの後頭部を蹴っ飛ばした。すると、モヒーが驚いたように目を見開く。

「田中賞受賞者だと……！？」

「それがどうしたアアアア」

いや酷い！ 海星！

後ろから頭を思いっきり殴るな！ 流石に可哀相だ！

それにしてもモヒーはなんであんなびっくりしてんだ？

「こいつらが生贄だったのか……。すぐにボスに知らせるか」

「生けッ……！？」

……モヒーは「撤退だ！」といい、ティワワを従えバイクに乗って去って行った。

それにしても、生贄だって！？ 俺達が！？

「おい雑魚説明しろやアアアア」
マッシュ

「えエ！？ 知りませんよ、田中賞に関してはさっき言った事がすべてだと小学校で習ったんですよ」

習うか！

しかし、コイツは本当に知らないようだ。だとしたら生贄って一体……？

ストーリー上での演出か？ そんな訳はない。実際に俺たちは元の世界に帰れなくなっている。

ピンチになったから自然な流れで撤退できるように嘘を付いたのか？ 奴はそんな子供染みた性格じゃないだろう（多分）。

となると、奴は本当の事を言っただけになる。

元々「なんでも願いが叶う」なんてドラゴンボールみたいな漫画の世界ではともかく、現実では有り得ない。

生贄……か。

どうやら俺たちはとんでもない事に巻き込まれているらしい。俺たち”だけ”。

モヒーは田中賞の存在を知っていた。だとしたら盗賊団Xのボスの陰謀か？

……わからない。

わからないが、このストーリーを進めて行けば何かを掴めるだろう

う。

となれば、やる事は一つ。

前に進むだけだ。

さあ、一歩踏み出そう、元の世界へ帰るために――。

そう思い、俺は左足を前に出し――転んだ。

「なにしやがる！」

「いや珍しく真剣な顔で何かを考えてたから何してんのかなー、と思っただけで急に気色悪い顔して歩き出そうとしたからよ。びっくりして足掛けちゃった」

びっくりした人がする行動か！？ つーか気色悪い顔で悪かったな。

と心の中で反論(?)しつつ、俺は今まで考えていた事を海星とマッシュに話した。

＊

「……成る程。よーするにゲームをクリアすりゃいいんだな」

「いや結論はそうなんだけど……。お前焦りとかないの？ 一歩間違えれば死ぬかもしれないんだぜ」

「まあ、不安がないつつつたら嘘になるけどよー。くよくよしてても始まらねえだろ」

……それもそうだな。

海星はこういう時頼りがいがある。

「では、次は"マウンテンの森"へ向かいましょう」

「何処そこ？」

海星が尋ねる。

「ボクたちが最初に出会った森ですよ」

「はあア？」

戻んの！？ 此処に来た意味無かったじゃん！

俺が思ったのと同時に、海星は同じ事を聞いたらしい。
その問いかけに対する答えが返って来た。

「いあ、嘘をふいたんへはないへふ。この町によらいほ、先へは
進めなかったんへふ」

何言ってるかよくわかんねえ！

つーかなんでそんなに顔腫れてんの？

……海星が殴ったのか。騙されたとおもって。

「まあいい、行くぞ」

なんか仕切りだしたよこの人。

俺も後を追いかけてようとしたが、誰かに呼び止められた。
ってこの声、どっかで――？

「おー！ 天野に海星じゃん！」

「……陽太郎？」

……お前も「ぱ^{コレ}られるくえすと」やってたのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8276h/>

ばられるくえすと

2010年10月14日13時33分発行